

## 第2回 府立北桑田高等学校の在り方検討会議（概要）

- 1 日 時 平成29年3月10日（金）午前10時00分～正午
- 2 場 所 あうる京北 2号ゼミナール室
- 3 出 席 者 16名  
府教育委員会 川村指導部長、山本高校教育課長、  
中島高校改革担当課長 ほか
- 4 概 要
  - (1) 説 明
  - (2) 意見交換（主な意見）
  - (3) あいさつ

### ■説 明

□府教育委員会：資料説明

### ■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

◇ ただいまの説明に加えて、高校から補足があればお願いしたい。

○ 中期選抜の合格発表は来週だが、平成29年度在籍者数は平成28年度の206名から約20名減少すると思われる。185～187名とかなり少子化の影響を受けることになる。

教育課程等については、普通科は難関大等に向けた進学対応の文理探究コースと、一般就職、専門学校・大学進学にも対応できるキャリアデザインコースの2コースがある。5～6年前に比べて選択科目が減少しているが、府教委の配慮により教員定数については減っていないが、生徒の減少速度が早いため、理数系の科目は3名で授業を行っている状況があるなど、目に見えないところで授業がやりにくくなっている。選択者が1～2名で開講が認められるかということと、進学で学力をつけるにはある程度の集団で切磋琢磨することが必要だと思われる。

森林リサーチ科についても進学対応と技術伸長コースがあり、中期選抜の受検者がなかったため、来年度の入学者は20名となり、どちらかのコース選択も選択者が一桁になることが予想される。実習科目についてもある程度の集団がないと多様な演習ができないことから、教育内容が失われることが危惧される。

部活動については、公式戦については、他校との合同チームまたは5名の団体戦に3名で出ているクラブもある。女子バスケットボール部は部員が2名、サッカー部も6名という状況であり、本日も部活動顧問会議を予定しているが、来年度以降、部活動編成をどうするか考えているところである。生徒の減少速度が早いため、学習面・部活動面でこれから教育効果の面が危惧される場所である。

◇ 先ほどの説明において、地域の子どもたちの教育環境と地域における高校の役割という2つの観点をお示ししているが、そのあたりについていかがか。

○ 昨年12月に第1回検討会議が開催され、その時には美山町の住民として思っている個人的な意見を述べた。本検討会議のことが京都新聞等にも掲載されたが、本日の提案も含め、地域でしっかりと分析した上で、地域としての要望や提言をまとめ、それをこの検討会議に反映させることが重要だと話をしたところである。

それを受けて、美山町内の組織を立ち上げようと、1月20日に準備会を、2月13日に「北桑田高校の在り方懇話会」という名称の会を開催した。北桑田高校長のほ

か、美山町の小・中学校長、PTA会長、後援会長、美山まちづくり委員会のメンバーに出席していただいた。この美山まちづくり委員会は、美山の5つの振興会長、各地域から専門的な知識のある方5名の合計10名で組織されており、美山の医療・福祉・教育等、美山町全体に関わる課題を協議する組織である。懇話会では、美山の生徒の学力や進路保障の観点から様々な意見が出された。「美山の生徒は普通科志向が高いこと」、「林業関係の学科として全国的にもトップクラスの森林リサーチ科を存続させていくことが大事であること」のほか、寮の課題と対応策についても話をした。懇話会の座長にはまちづくり委員会の大野委員長を選出し、今後は京北とも一体となって活動していくことを確認した。

それを受けて、2月24日に京北出張所に久保京北自治振興会長や各地区の自治会長、中島元美山町長、懇話会の大野座長、私が集まり、魅力ある北桑田高校にするための提言や地域として協力できることについて話をした。その中で、近いうちに京北・美山が一体となった、北桑田高校の存続を期する協議会を設置することになり、協働で活動していくことを確認した。本日の意見も含め、本検討会議の資料を参考に検討しながら、意見をこの検討会議に反映させていきたい。

- 2月24日に京北と美山の20数名が集まり、北桑田高校をどうしても残していこうという協議会を立ち上げることを決定した。本検討会議には、京北・美山の代表として懇話会の代表が出席しているが、北桑田高校の存続は大変な問題であると地元として思っている。通学のこと、寮の問題、民間の請負等が考えられている中で、多くの方にご意見を聞いてまとめてもらいたいということ、かつ、存続をお願いしたいということで、次回から美山と京北の本検討会議における参加者を増やしていただけないかと提案したい。協議会には、美山・京北のメンバーだけではなく、府議会議員や南丹市議会議員にも入っていただき、要望するという形を作り上げていきたい。検討会議については、10数名増員してもらいたいので協議してほしい。

- ◇ ただいまの提案は、京北・美山合同で協議会を立ち上げるので、協議会関係者を本検討会議にも出席させてほしいということの良いか。(そのとおり)  
今のご提案に対して何か意見はあるか。

- 前向きな地域の取組として貴重な提言である。私も懇話会のメンバーの一員として会議に出席していたが、現状の北桑田高校を取り巻く環境について、赤裸々に課題が提案されたと感じられた。課題整理をし、組織役員も確立して体制が整った。また、京北の自治会からは、早くから京都市長に対して、通学圏の問題、通学バスの補助、バスの便数増の問題などについて、具体的なアクションを起こしていただいております。後援会として心強く思っている。

議員の方は地域の代表なので動いてもらわないと空回りするのは当然である。南丹市議会議員、京都市議会議員、府議会議員も含め、より強固なアクションになるようお願いしたいと思っているし、加えて、美山と京北が歯車を一本化することが、北桑田高校を強くする大きなポイントなので、何とかがっちり一本化して組織を前向きに動かしていく必要があると思っている。

- ◇ 確認であるが、議員に入っていただくのは協議会であること。その上で、協議会から更に数名、本検討会議に参加したいという提案で良いか。(そのとおり)  
今のご提案に対して意見等はいかがか。(意見なし)  
特に異議等がないようなので、人数等については事務局と協議会で調整することとし、事務局に一任していただくということによろしいか。(意見なし)  
ご紹介いただいたご意見や本日の説明内容を踏まえて意見をいただきたい。

- 地域の熱い思いももちろんあるのだが、資料P3にあるように、今年度の募集人員に対する受検者数の現状は大変厳しいものであると感じている。なぜこのように志願者数が減っているのかという点を、早い段階でしっかりと分析をしないと生徒数を増やすことにはつなげていかないとと思う。

通学圏の拡大については、現在の通学圏に限っても、地元中学校の出身生徒がなぜ減っているかと言うと、一つには公共交通機関で学校に通うのが大変不便であるため、結果的に保護者が朝と夕方に送迎しなければならないという状況が多い。北桑田高校に送迎できる保護者の子どもは北桑田高校を志願するが、一方で、例えば、京北地域でも細野辺りの地域になると、北桑田高校に送迎するぐらいなら、親の勤務先がある京都市内の高校の方が送迎がしやすいというように、高校を選択する上で保護者の勤務先のある場所が大きく影響していると思う。美山地域も、保護者が園部方面に通っておられる方が多いので園部高校に通う生徒が多いのではないかと。また、京北と園部の位置関係で言えば、例えば、北桑田高校から園部駅までは30～40分程度で行けるが、園部方面に勤務している方は少ないので、園部方面の高校を志願する生徒が少ないのではないかとと思う。したがって、通学圏を拡大したところで、園部方面から北桑田高校までの直通バスもないし、乗り継ぎができるバスもないと思う。通学圏を拡大することはとても良いと思うのだが、少なくとも通える公共交通機関がない限り、拡大しても志願者数は増えないと思う。

- 美山では1年前に小学校が統合され5校が1校になったが、私の近所の小、中学生の子どもがいる若い夫婦はそれに嫌気がさし、統合前に京都市内に引っ越された。したがって、北桑田高校は何が何でも存続してほしいと希望する。そのためには通学の問題、少子化の問題が大きく関わってくるとは思う。これ以上美山が限界集落化しないよう、何としても小学校・中学校・高校を残してほしい。

- ◇ 北桑田高校への交通の利便性を良くする必要があるというご意見だが、一方で、他地域から北桑田高校に来たいと思える教育内容にしていかなければならないと知っている。ただし、通学区域を広げて他地域から北桑田高校に来られるようにすると、逆にこの地域の生徒も他地域に行くことができるようになる面もあり、そこが一番大きな課題と考えている。この地域での教育について、こういう観点で教育内容の充実を図れば良いのではないかとといった提案などがあればご意見をいただきたい。

- 生徒数が少なくなると教員数が少なくなり、多様なコースが設定できなくなる悪循環の状況は非常によく分かるが、結論から言えば、やはり多くの生徒が普通科を志望する状況を踏まえると、魅力ある普通科をどうつくっていくのかという視点は絶対に必要だと思う。

子どものニーズや保護者のニーズがどうかということを少し振り返ってみると、間違いなく北桑田高校については、絶対残してほしいという声はある。もちろん現在の北桑田高校の教育内容に対して魅力を感じている方もおられるし、物理的に「なくなったら通えない。どこに行けば良いのか。」という方もおられる。残してほしいという方が多いのは事実である。

京北地域においては、平成32年度の施設一体型の小中一貫校の開設に向けて現在取組を進めており、その中で柱にしていきたいことは、例えば、学力の問題や新学習指導要領において小学校で英語科が導入されようとしているので、英語に特化した学力の向上などを目指す学校づくりを考えている。小中一貫校として目指している教育をさらに高校で伸長できるようにしてほしいという思いもある。

現在、本校から北桑田高校には8割の生徒が進学しているが、その中には、実は前期選抜で京都市内にある、例えば、京都工学院高校や嵯峨野高校の京都こすもす科、西京高校のエンタープライジング科、堀川高校の人間探究科などの専門学科を

受検して、残念ながら不合格であったので、中期選抜では北桑田高校を希望するという生徒もいる。したがって、通学圏が広がればそうした生徒たちは北桑田高校に戻ってこなくなる可能性が生じる。中期選抜でも北桑田高校以外の京都市・乙訓地域の高校を受検する可能性がある。目には見えないが、そうした専門学科を目指したい、あるいは、普通科でも総合学科のような教育内容を展開している高校を目指したい生徒が、結果として少なからず北桑田高校に進学している。本来はこういう勉強がしたかったという生徒が北桑田高校に入学している。このような状況のまま、京都市・乙訓通学圏に変えてしまうと、生徒の選択肢が一気に広がるので、高校まで送迎しようという保護者、多少お金がかかっても京都市内の高校を受けさせようという保護者が増えるのは間違いないと思われる。一方で、京都市・乙訓通学圏の中学校の生徒が高い交通費をかけてまで北桑田高校の普通科に行きたいかという、現状ではあまり期待できない。出て行く方が多くなると思う。北桑田高校の普通科をより魅力や特色のある学科にどうしていくのかということが最大のポイントになってくる。

小中一貫教育との接続や、専門学科を志望するような生徒がこんなコースが北桑田高校にあれば京都市内の高校を受けずに第一希望で北桑田高校を受けたい、となるようにコースを充実するなどすれば、出て行くだけでなく入ってくることも期待できるのではないかと思う。

◇ 先ほど地域の学校という視点で言えば当然地域の町づくりとも連携をしていかなければならない面もあると思うが、地域の町づくりとして取り組んでいただいていることと北桑田高校との関わりなどについてご意見をいただきたい。

○ 京都市の京北では公共交通としてふるさとバスを運行しているが、北桑田高校の生徒の多くが朝と夕方に保護者の車で送り迎えしてもらっているため、利用者が少ないことが課題になっている。そのため、保護者が高校への送り迎えを自家用車でしているという実態との齟齬を解消していきたいということで、北桑田高生については、試行的に、例えば、京北地域内で30km近くある黒田から北桑田高校に200円で通学できるようにした。通常は、周山から黒田・灰屋の間は運賃800円、そこから北桑田高校までは通常1,100円程度かかるのだが、それを200円で通学できるようにしようと取組んでおり、4月1日以降も継続する。ほぼ恒久的な制度にしていきたいと思う。併せて、高校生の部活動終了後の時間にも運行するよう調整している。少しダイナミックに料金とバスの時刻を変えたが、これが少しずつ高校生に浸透し、効果が表れてきている。さらに多くの生徒に利用してもらいたいということで、高校とも調整し周知しているところである。今ある様々な仕組みなどを北桑田高校を守るために、あるいは北桑田高校の生徒や保護者にとって良い方向となるよう、ダイナミックに改革をしていく姿勢で取り組んでおり、今後も様々な応援ができればと考えている。

住民の方々からそれほど頻繁に高校についての意見を聞くわけではないが、普通科の存続はとても大切な視点だと考える。中学校からの意見にもあったように、普通科でも、魅力ある北桑田高校にしていくためには普通科の特色出しが絶対に必要ではないかと思う。英語教育については言えば、地域を愛する心と世界的な視点を持つ子どもを育成していくという京都市の小中一貫校の教育理念とその延長線上に北桑田高校の普通科があればありがたいと思う。

本日の府教育委員会の冷静な分析資料はとても大切であるが、次回会議に向けてお願いしたい資料がある。毎年夏・秋に、学校説明会やオープンキャンパスを北桑田高校で実施されている。かなり多くの中学生が北桑田高校に興味を持ってオープンキャンパスを訪れていると聞いているので、参加者数などがわかればありがたい。参加者が募集定員より多いのであれば、まさに寮さえあれば定員が充足するのではないか。現在の寮は1学年15名の枠しかない。3学年合わせて45名前後である。そ

の状況を努力して改善すれば、昨年、一昨年、また、平成29年度選抜の数字も変わってきたのではないか。それも含め、京都府も京都市も様々な工夫や努力をして高校を応援していければと考える。

- 8月等の学校説明会参加者は70名を超えている。森林リサーチ科については府内の他地域からも参加者がある。また、周山中学校や美山中学校の生徒は折に触れて本校に来てくれている。

寮についてだが、今年度の選抜では、森林リサーチ科合格者20名のうち5名が学区内、15名が学区外であったので、前期選抜の発表日に選考するにあたり、15名ならば全員入寮させられると思っていたが、実際には希望者が11名で、あとの4名は京都市内や他府県から通学するということであった。

寮については費用的な課題もある。我々としては3食付いて3万円は妥当ではないかと思っていたのだが、実際には諸経費でプラス1万円から1万5千円程度かかることから、様々な家庭状況がある中で、こちらが思っている以上に経済的な負担になっているという現状がある。その点について、地域では要望を出しているのだが、寮の設置だけではなく具体的な支援も考えてもらわないと、仮に寮があっても他地域から来てもらうのはなかなか厳しい。

- 人口が減少するから生徒数が少なくなるわけだが、そのことによって素晴らしい教育を進めることが困難になる、多様な教育が行いにくくなると先ほど説明があった。しかし、生徒数が減少すれば、なぜ多様な教育が行えなくなるのかが地域の方にとっては具体的にピンと来ないのではないか。一方、地域の方にとっては、学校の存続の問題に変わってしまっている。そうではなくて、在り方を議論しているのだから賛否を問うべきではない。そうしたずれが生じる原因としては、教育関係の参加者が多いため、その方々だけに理解できる資料になっているからではないかと思う。もう少し工夫してほしい。

南丹高校にはテクニカル工学系列がある。まだ設置2年目であるが、毎年16~17名の入学生がある。このコースで学ぶ生徒への支援を行政と高校が一体となって、南丹管内にあるものづくり企業や食品企業にお願いし、現在のところ、50社ほどが学びの支援、就職支援、あるいは技術的なアドバイスなどをしてくださっている。

先日も地域の企業からの「君たちに期待している」というメッセージを伝えるために工場見学会を行った。生徒と保護者にも声をかけ、3社ほど見学した。このように、行政側が学校を支える手段や考え方もある。人口がオールジャパンで減っていく中、地域からはそれでは駄目だということで、移住・定住・交流という大きな動きが起きている。そこについて、我々はもっと知恵を出さなければならない。

また、現在、北桑田高校に在籍している生徒や保護者から高校はどのような評価を受けているのか。それが分からない中で生徒数が減るから在り方をどうこう言われても、意見が言いにくいのではないかと思う。自らの学校を生徒はどのように思っているのかがわかった方が議論が膨らむのではないか。

- 去る3月1日の北桑田高校の卒業式に参列させてもらった。とても良い卒業式で、85名の生徒が卒業していった。やはり北桑田高校でなければ育たないというか、とても良い環境の中で生徒が育っているのだと思ったところである。きちんと子どもたちを育てている高校であり、規模は小さいが光るところがある高校をこれからも大事にしていきたいという印象を持った。

生徒の答辞や送る言葉の中には、「地域」という言葉が何度も出てきた。自分がこうして3年間過ごせたのは地域の人たちの後押し、協力があってのことであったという言葉聞き、この高校は地域と一体になって運営されている高校だということがわかった。このことは、これからも大切にしていかなければならないところだと思う。

本日の資料を見ると、平成元年に比べ生徒数が半分以下になってきているし、今後増える要素はないという感じである。一体これから先どうなってしまうのかと本当に心配する。これからどうするのか、様々なことを考えていかなければならない。資料P1にもあるが、高校においては、青年期の後期に入っていく子どもたちの発達の特性を考えると、個人差が出てくるため、それに対応した形で多様化していかなければならない。特に、カリキュラムについては、彼らのニーズにあった教育、応えていく教育として多様化しなければならない。また、もう一つ重要な視点が抜けていると思うのだが、高校というところは、小・中学校教育と異なり、専門教育を行うところであるので、教科の指導における専門性を確保しなければならないが、あまりにも子どもの数や教員数が減ってしまうと、専門性の確保・維持が難しくなる。この点をしっかりと考えていかなければならない。そうでないと、知的にすごく伸びていく青年期の子どもたちが、ニーズに対応した知的なレベルの高いというか、教育の質を確保できる教育を受けられないことになる。

この高校は地域にとって宝物であり、これからも大事にしていきたいということははっきりしているが、これだけ子どもが減ってくると、その中でどのようにしていけば良いか。当然子どもの数を増やしていくということで様々な意見が出されているわけだが、学校の内容は一体どうなっていくのかということを考え直してもらいたい。前回、森林リサーチ科にまず焦点を当て、今後どのように作り直していくのか。それを魅力にして高校をつくり直していくことが考えられないかと提案した。この高校が設立された経過を振り返ると、農林学校として、林業学が一つの特色になって発展している。その背景としては、京北・美山の林業、山林資源がより豊かになっていくために、それを支えていけるような人材を育てていくという趣旨で生まれてきた高校だと思う。その点をこれからも大切にしなければならないのではないかと。ただし、今のままの森林リサーチ科でこれからも大丈夫だろうかという点は考え直さなければならない。2学科の維持が無理ならば、思い切って1つにして普通科にしてしまう。その中に、森林科学と言うか、森林リサーチよりも少し幅の広い、しかも学問的に深く勉強できるようなコースを考えてみる。今の若者たちが「あんな高校なら行ってみたい。」と思うような魅力のある高校の内容をどのようにつくっていくかを議論していかないと、外側の状況をつくるだけでは不十分だと思う。現在の2学科制をどのように変えていけば良いのか。特にこの学校の財産である森林リサーチ科で取り組んできた内容を生かして、どのような新しい北桑田高校をつくり出すことができるのか。併せて、レベルの高い普通科をつくっていく。学科構成、コースの構成、内容について本格的に検討しなければならない。

子どもの数が減れば、どうしても学校運営は難しくなってくる。それにも関わらず存続させようとするれば例外的な措置を考えなければならない。例えば、この高校を小規模でも質の高い高校としてモデル校にしてはどうか。そのためには基準を少し外して、例えば、教員数の確保や寮の運営といった面で特別な配慮をしていくなどバックアップをしてもらわないと、今のままで子どもの数が減ってしまうと独立した一つの学校として体をなさなくなる。小規模校化していく中で、質の高い教育を維持しながら次の良い方向へと展開していくことが必要だと思う。そのためには、美山・京北の若者が増えるという状況をどうつくっていくのかということと絡めて考えなければならず、高校さえ残せば良いということではない。むしろ高校を無くすことが地域の衰退を招いてしまうため、地域を盛り上げ、高校を存続させながら次につないでいくと考えるのが論理ではないかと思う。

- 美山の現状であるが、面積は南丹市の55%、340km<sup>2</sup>と非常に広大であり、平成29年1月1日現在の人口は4,009名、高齢化率は45.3%と45%を超えた。そうした中で、美山の町づくり委員会、また、各振興会と連携しながら定住促進に取り組んでいるところである。前回の検討会議の際、紹介があったとおり、美山小学校の児童の3割が、Uターン、Iターンした方だと認識している。平成28年度の小学校1年

生は16名。産まれた子どもの人数は平成27年度は17名、26年度が18名、25年度が22名、24年度が27名である。定住促進、Iターン、Uターンをしてもらおうと思うと近隣に小学校・中学校・高校があることが最低限の必須条件だと考えている。行政として、子どもたちの進路保障もしていかなければならない。したがって、資料のP5にもあるが、他地域や他府県からの受入、寮の整備、選ばれる学校づくり、学科の見直し、通学路の利便性の確保などの課題を解決できる、解消する議論ができればと考えている。

- ◇ 先ほど周山中学校の校長先生から周山の小中一貫教育校では、英語教育を主体に進めていこうとされている中で、高校への接続が大切になってくるのではないかとのご意見をいただいたが、美山中学校の取組の延長として北桑田高校に期待することなどあればお願いしたい。
- 美山中学校だけでなく美山小学校も含めて、「ふるさとを愛し」という連携した取組を進めている。特に、総合的な学習の時間を中心に地域から学ぶ、地域で学ぶ、地域の人から学ぶ、物から学ぶという学習に取り組んでいる。「美山学」ということで小中連携して系統的な学習にならないかと相談しているところである。地域をフィールドに様々な学びを深めている北桑田高校に繋いでいけるような形で、ふるさと美山を自慢できる、誇りに思える学びをして次のステップへ進んで欲しいと学習に取り組んでいる。特に、地域の振興会や商工会など様々な地域の方にお世話になり、できるだけ地域の外に出かけて、職場体験や振興会のイベント、ボランティアなどに積極的に参加をし、地域の人と交流をしながら学ぶという取組をしている。小学校との連携は統合前から準備をしているのもあり、まだ完成には至っていないが、うまく接続していけるよう準備をしているところである。
- 美山小学校が再編して1年あまり経つが、本年度から文部科学省の「少子化・人口減少に対応した活力ある学校教育推進事業」の指定を受け、子どもたちが地域の方に支援してもらったり、学校がボランティア等で地域に貢献してだけでなく、地域の方々と学校、教職員が同じベクトルで美山の子どもにどう育ててほしいかということ話を話合っている。美山町づくり委員や振興会長、教職員と地域の方々、コミュニティースクール委員、学校評議員、町づくりの方々、行政にも加わってもらい、ふるさとを原風景にしながら、将来を生き抜く力、どんな境遇でも生き抜いていく力をつけてもらうために何ができるかについて、一緒に考える少子化人口減少の研究推進会議を設置しているが、そこに町づくりの方にも入っていただいて話をしように思っている。その予算を使って、今夏、成功事例である島根県の隠岐島前高校に行こうと考えている。

先日、北桑田高校に児童を連れて行き、森林リサーチ科の生徒にベンチ作りなどをさせてもらった。実際に北桑田高校に行くとその良さを感じると同時に、隠岐島前高校のように町全体でのバックアップとを併せて魅力づくりをしていかないと、実際には難しいと思う。

前期選抜でうまくいかなかった中期選抜で北桑田高校に戻る生徒がいるわけで、校区が広域になるのなら交通手段等を行政にサポートしてもらい、寮も半額にするなど、行政施策を合わせたものと、学校独自で打ち出す魅力、普通科で森林科学とか生物学にも通じるような学科編成にする。さらに、「美山学」との連続性、京都市での英語の取組や、南丹市も平成30年度から実施していこうということで、この4月から小学校3、4年生に外国語活動を取り入れ、5、6年生で外国語科に取り組んでいくこととしている。そうしたことも連動できるかと思う。隠岐島前高校の地元の海土町はとてもコンパクトな行政で、例えば、美山町のような規模である。2つの小学校があり、行政単位がとても小さくコンパクトなのでやりやすいのかもしれないが、北桑田高校は京都市に立地しているが、府立学校なので設置者が

違うという難しさがあると思うが、なんとか行政サポートと他からの援助、小学校・中学校・高校を一貫校にする。美山もほぼ一貫校のようなものなので、施設が分離していてもすぐ行けるので、そういう特色を出していけば良いのではないかと考えている。

- 今回の資料を見て正直がっかりしている。P5の主な課題は、蒸し返すまでもなく、当然みなさんわかっていた話だと思う。寮の整備や選ばれる学校づくり、学科の見直しについての案が、本日提示されるものかと思っていたのだが、残念ながらそういうところまでは出ていないので物足りなさを感じている。

P4の「検討の視点」に記載されていることはそのとおりだと思うのだが、この地域の子どもたちの教育環境を考える上で、通学圏の検討も大切なことだと思うが、その前にまずはどういう教育をするかということを経験しなければならぬのではないかと考えている。具体案として何が示されているのかということ、全国募集をするということくらいか。

P4の「地域における高校の役割」の中で、「地域創生における高校があることの意義」がはっきり示されているにも関わらず、P5で「北桑田高校を他校と統合する」という選択肢が書かれていることに疑問を感じている。この会議は、地域の方に御参画いただく中で、存続の話をする場ではなく、在り方を検討する場だと思う。どのように北桑田高校を良くしていくのかということをもう少し積極的に議論していきたい。そのためには、先ほどもあったが、京都市も京都市教育委員会も全面的に応援・支援していきたいと考えているので、まずは府教育委員会の考えを次の会議には出してもらいたい。

- 南丹市教育委員会としては、本市の学ぶ生徒たちの通学圏ということで希望進路が叶えられるよう応援していきたいと考えている。また、今回、美山町で懇話会という組織ができ、地域が真剣になって考えておられることに対しては、大変重要なことであると教育委員会でも統一見解を持っているので、教育委員会としてできることについて一緒に頑張っていければと思う。

- 資料P5にある他校との連携、存続の形態という部分を見て考えてみたのだが、先日、新聞で少し読んだだけだが、丹後地域における「学舎制」はなかなか興味深い形だと思った。私見であるが、例えば、園部高校を核として北桑田学舎、須知学舎とした学舎制にすることで、教職員を共有したり、少し削減できた部分で、例えば、園部学舎と北桑田学舎の間に連絡バスを走らせて、週末の部活動での活用や園部高校の京都国際科の専門的な授業、逆に北桑田高校の専門的な授業を双方の生徒が受けられるようすれば、小規模校における専門性の確保が北桑田学舎でできる可能性があるのではないかと考えている。授業においても、進学に向けた授業のようなものを園部学舎でする場合は、バスで北桑田学舎の生徒が時間に合わせて行ったり、部活動では、例えば週末の野球部の活動は北桑田学舎で行い、サッカー部の活動は園部学舎で練習したりするなど、一緒に活動するというのも選択肢としては良いのではないかと考えている。

- 先ほどは協議会員の参加について承認いただきありがたい。  
先ほども意見があったが、北桑田高校の協議会が本検討会議に入るからには、次回から北桑田高校の魅力で人員を確保していくことを議論したい。京北においても、現在人口が5,000名に満たない。皆さんと一緒に考えて、様々なことを考え、7,000名にしていかなければならないという時に、北桑田高校が無くなってしまうと、5,000名がみるみる4,000人に減っていくのではないかと危機感を感じている。

魅力は何かと言うと、美山も京北も、かつて林業で栄えた町である。このことをもう一度見直そうということで、農業法人の方とも何回も会っている。その方に京

都市長にも会っていただき、未来の京北を考えてもらっている。その一つに、京北や美山の農業では、水田のみではなく様々な野菜や果実作りなど、いろいろなことに取り組んでいる。その方が、「北桑田高校を卒業した子で大学へ行く子もいるが、その後は戻ってきて農業をしてほしい。その生徒を3年間見させてほしい。経営者としてじっくりと農業を教えたい。」「3年間で一人前にする。私が経営人として育て上げる。始めから大きな資本がある訳でもないのに、耕運機も農業機械も全部提供する。生徒たちが自活して経営者となり、この地に残り、結婚をして子どもをたくさん生み育ててもらおう。」とおっしゃったので、私も感動し、ぜひとも市長に会ってもらいたいとアポを取ったところである。実際、京北で20町を越える田を確保されているし、次は美山にも手を伸ばして頑張っていたいただきたいと思っており、北桑田高校の卒業生は将来こういう経営者になれるのだという魅力も示して、定員割れを解消していきたい。また、林業については、私はバイオマス発電については絶対に反対であると京都市にも府にも言っている。確かに未来のエネルギーとして大切ではあるが、京北・美山の間伐材だけでは年間運転ができない。10万㎡分の木を集めるということは、建築材の太い木を集めるのであれば容易だが、値打ちのない、㎡単価5,000円、6,000円の木を10万㎡集めるのは無理である。京北や美山で材を供給できない。舞鶴、瀬戸内海、あるいは鳥取の海辺でそういう木を探せば良い。代替を頼らなければできない。したがって、森林リサーチ科においては、間伐材や良材について色々なことを教え、立派な木を育てる科であってほしい。農業従事者の年齢が高くなっている。若い人たちが来てくれて、人口が7,000名となれば、多くの生徒が北桑田高校に入学を求めてくるであろうと思っている。

本検討会議においては、南丹市に統合だとか、京都市・乙訓通学圏がどうということではなく、柱として北桑田高校を残すことを据えて、教育委員会と私たちが一緒に考え、北桑田高校をますます発展させるような会議にしてほしい。

- 色々のご意見を聞かせていただいたが、北桑田高校は本当に地域に守られた高校だと改めて確信をした。京北・美山地域の組織化、さらにその組織の一本化して本検討会議への出席者を増員してほしいという意見を出していただき、PTA会長として、また保護者として、力強いご支援をいただいていると感謝している。

先ほど保護者の評価についての資料がないということだったが、私も詳しくはわからないが、オープンキャンパスに来ておられた保護者には知り合いもあり、話を聞いていると、参加者は多いが、寮に入れられないかもしれないと聞き、数はわからないが、受検自体諦めている方もいるようである。金銭面での行政の支援も必要だと思うが、入りたいという子どもたちが入れる環境づくりを早く考えてほしい。前回も、北桑田高校を発展させるため、どういうことが考えられるかを考えてほしいと述べた。子どもの数の減少はかなり前からみんなわかっている。どうしていくのかということがまだまだ見えてこない中で、いかにも高校を無くす方向に進んでいると取りかねない資料である。前回から今日の会議までに前を向いてどのように考えられたかを聞かせてもらえるかと思っていた。PTA会長も代わるので、今日の会議をもって引き継ぎをしようと思っていたが、ぜひとも次回、前向きな考えで提案をしてもらいたいと思っている。

私の子どもも色々な所に行きたいという気持ちは持っていたが、北桑田高校に入学して、来てよかったという生徒の声、保護者の声を特に京北・美山以外の保護者の方から聞かせてもらっている。環境面についても、先生の教育指導に関しても、他の高校に劣っているとは思っていない。少子化と言うが、環境面も含めて良い高校は存続してもらいたいし、京都府も教育委員会も、そういう考えを持ってもらいたい。

- 学校評価アンケート等については毎年10月下旬に行っており、学校評議員会等でもすでにお示ししている。ホームページにも近々掲載予定である。保護者や生徒か

らは、ありがたいことに満足度について高い評価をいただいている。資料P5に「地域の子どもたちや保護者のニーズの把握が必要」とあり、先ほど中学校等からもご意見があった。子どもたちには多様なニーズがあり、一部の生徒は、本意かどうかはわからないが、中期選抜などで本校に戻ってきているということである。丹後地域でも保護者アンケートが行われたし、他校でもそういう手法がとられているので、ぜひ地域の中学生、小学校高学年の児童や保護者の方々へのアンケートを行っていただきたい。客観的な視点として魅力ある北桑田高校づくりに活用したい。

- ◇ 時間も迫っているが、何か発言いただくことがあればお願いしたい。(意見なし)  
ただいま、地域の中学生、小学生、保護者の方の意向も踏まえた魅力ある教育内容の検討も必要ではないかと提案をいただいた。これについては、事務局で関係機関と調整をさせていただく。

また、次回に向けて資料についても提案をいただいた。具体的に町づくりと一体となった取組、課題解消に向けた対応、魅力ある教育内容をどうしていくのかということについても議論をしていかなければならないと考えている。府教育委員会から案を示してほしいというご意見もいただいた。本日のご意見については、次回の検討会議に反映したい。

## ■閉会あいさつ

長時間、非常に熱心なご意見を多くいただきお礼申し上げます。資料に関するお叱りの声も多かったことは受け止めます。

府教育委員会において、これまで北桑田高校を巡っていろいろ考えてきたことがあるので話をさせていただきたい。

資料P5-1に地図を示している。赤線が北桑田高校と京都市・乙訓通学圏の境界である。通学圏とは、府の制度で言えばより広域の通学区域になる。本府は二重の通学区域制度になっており、京都市・乙訓通学圏では二重はないが、北桑田高校には学区を設定している。亀岡高校、園部高校、須知高校の学区を含めて、口丹通学圏である。京北地域が京都市右京区になったことも踏まえて、「京北地域を京都市・乙訓通学圏にするという方法があり得る」ということ、「美山地域は園部高校と同じ学区にするということもあり得る」ということでこういう図にしている。しかしながら、先ほど中学校から、前期選抜で京都市内の専門学科を受検できるという選択肢があるが、中期選抜では京都市・乙訓通学圏の高校の普通科は受検できないので北桑田高校に戻ってくるというご意見をいただいた。そのため、通学圏を京都市・乙訓通学圏にすると、北桑田高校をどう魅力ある高校にしていくかを固めておかないと、ただ地域から出て行ってしまうことになる可能性は高い。美山地域を園部高校と同じ学区にする場合も同じことが起こる。このことは、一つの制度的な検討課題ではあるが、これだけを先に決定することはできないと思う。

また、学校の在り方だが、高校として専門性や進学に向けた指導の在り方、部活動などにおいて質の高さをキープしなければならない。私どもは丹後地域でもそのことを追求しているが、北桑田高校についても同様と思っている。今年度の美山中と周山中の卒業生は合わせて62名、それに対し北桑田高校の募集定員は、森林リサーチ科を含めて90名としている。森林リサーチ科の定員30名が全て京北・美山地域以外の生徒で埋まり、地元の中学生在が全員北桑田高校の普通科に進学すれば定員は充足するが、それはなかなか難しい。つまり、今の募集定員は、必然的に初めから割れるような姿になってしまっている。なぜこのような募集定員にしているかというと、教員定数の関係もあって、割れるかもしれないが3学級規模で設定しているということによる。今後も子どもが減っていく状況にあるので、他地域から生徒を確保できないと、3学級を維持することはとても難しくなる。したがって、検討すべきことは、他地域から呼び込む方策を考えると他地域へ出ていかない魅力を高めること。学校の規模を想定してどういう学科構成をしていくか。専門学科と普

通科と2つの学科を置くのが無理であれば普通科のみとして、その中に専門性のあるコースを設けるという方策もある。本日そういう案をお示しすべきだったのかもしれないが、本会議は次年度に引き継いでいくので、今回は、この間府教育委員会として検討してきたことや学校の考えなどについて、資料を出す必要があるかと思った次第である。

先ほど、他地域から集める方策と述べたが、その一つとしては寮も考えられる。しかし、先ほど校長から説明があったように、寮費が払えないご家庭があることなどを踏まえると、ただ寮を造るだけでは解決しない。寮費をどうバックアップするかということも考えないといけない厳しさがある。それも含めて検討していかなければならないと思っている。

丹後地域における学舎制についてご意見をいただいたが、学校の形態の在り方として、丹後地域では学舎制の導入に向けて進めているが、これは様々な検討を重ねた上でのものである。専門性や希望進路の実現、部活動などについて子どもたちが伸びていく条件をキープするためにどういう形態が良いのかということを考えていく中で詰めていきたいと思っている。

色々と申し上げたが、本日のご意見を踏まえたまとめとさせていただき、次回につなげていきたい。今後とも皆様のご意見を多く賜り、より良いものにしていきたいと思っているのでよろしくご意見申し上げます。